排除し、これが立憲主義理論と対をなすとする。それ故に穂積
八束から国体明徴運動へと連なる「憲法と国体の関係」の中
で美濃部を異色の存在とする先行研究を批判し、「従来の憲法
（学）の枠組みを再編ししようとするものである。この分野
の近年の業績を増田知子の編集の研究がある。《九三〇》
排撃事件の思想的要因》（横浜市立大学論叢）四巻六号
学系列一・三合併号（平成七年七月）七七頁以下、《天皇機関
説排撃事件の思想的要因》（横浜市立大学論叢）四巻六号
平成一〇年・一七七頁以下）が、著者はこれも通説の枠内に
止まるものとするのである。
二本論文の内容をその構成に従って紹介すれば次の通りで
ある。
(1) 第一章「穂積上杉憲法学の国体論と、憲法との位置関
係」では、穂積上杉派の国体は、統治権の終損者が一人か、複数かの区
別で、そこに劣みはない。主権者の数による国体体制の分類で
ある。天皇権を完全に一致したもので、天皇権を範囲に当てる歴史も
国民感情を含まない。しかし、彼らにとって、国体と憲法
は完全に一致しなければならず、天皇大権を最終的に主権者で
ある君主国体は、彼らによれば万邦無比である。ことに、価値
を排除した分類概念の国体は、「日本の国家の基礎をなして居
る皇室の尊厳、国民の忠君愛国」という「普通の意義の国体
（美濃部）近時の政界に於ける憲法問題」（大正二年九巻六号
（大正三年九巻六号）「同時事憲法問題批判」（大正〇年
六五巻、星島二郎編「最近憲法論」（大正二年三巻二九巻
（昭和二年）九巻七ページ）「最近憲法論と国体論が明らかにされることだろう」（日本国憲法）明治四〇
年）において、君主主義と共和主義
『逐条憲法精義』（昭和二年）において「君主主義」と統一され
た国体は、「わが帝国が開国以来万世一統を上に戴いて居る
国体は、わが帝国が開国以来世系の皇統を上に戴いて居る
ことの歴史的事実と、わが国民が皇室に対して世界に比類なき
崇敬順従感情を有することの倫理的実事」を示す観念で、
法律上観念、憲法上観念ではない。美濃部の「非法律的観念
帝国国体憲法協会師範著三・一巻六号（大正二年）二八頁
星島・前掲『八十七巻』ただし、美濃部は「非法律的観念
のゆえをもって、国体を法律上の領域から排除したことなど
明らかにされていなかった。それが明確にされたのは、日本憲
法の基本主義（昭和九年）においてである。
(2) 第二章「美濃部達吉の政体論と国体論」では、美濃部の
政体論と国体論が明らかにされることだろう」（日本国憲法）明治四〇
年）において、「君主主義」と統一され
た国体は、「わが帝国が開国以来万世一統を上に戴いて居る
国体は、わが帝国が開国以来世系の皇統を上に戴いて居る
ことの歴史的事実と、わが国民が皇室に対して世界に比類なき
崇敬順従感情を有することの倫理的実事」を示す観念で、
法律上観念、憲法上観念ではない。美濃部の「非法律的観念
帝国国体憲法協会師範著三・一巻六号（大正二年）二八頁
星島・前掲『八十七巻』ただし、美濃部は「非法律的観念
のゆえをもって、国体を法律上の領域から排除したことなど
明らかにされていなかった。それが明確にされたのは、日本憲
法の基本主義（昭和九年）においてである。
(3) 第三章「美濃部達吉の政体論における国体の位置と憲法解釈

論者であり、さらにその故を以て立憲主義者で一、その憲法解釈は「国体の内容と不即不離の関係」にあるということ。②国体明徳運動は、全般、国民の常態である国体上杉憲法学が指導者内部の通説である美濃部憲法学に再び取り上げて代わる運動と理解される。しかしながら、用語において難解である点は著者、相田乱暴な、「憲法が見られるのも事実である。例えば、「美濃部憲法学は、憲法学上の立場である国体明徳派に最もよく継承され」\(\)の如く本論文は極めて意欲的で論争的な論考である。

三、叙上の如く本論文は、美濃部憲法学は、憲法学上の立場である国体明徳派に最もよく継承される。
二年、「憲法摘要」（五版・昭和七年）、「日本憲法の基本主義」

【注】

1. 『日本憲法の基本主義』（昭和八年）
2. 『憲法摘要』（五版・昭和元年）に於いても、『憲法摘要』では積極的に用いる如く、国体の発展に伴って言えど、初版（大正二年）から四版（昭和元年）までの『憲法摘要』では、国の発展の内容と意義という意味で、これを省略することが可能である。故に、国体の発展を伴って言えど、初版（大正二年）から四版（昭和元年）までの『憲法摘要』では、国の発展の内容と意義という意味で、これを省略することが可能である。